様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　５ 月 ２９ 日現在

機関番号：３３９１７
研究種目：若手研究
研究期間：2020～2023
課題番号：２０Ｋ１２８１７

研究課題名（和文）明治期怪談噺における憑依の表象―宗教文化の精神医学化をめぐって―

研究課題名（英文）Representations of Spirit Possession in Ghost Stories from the Meiji Era: Religious Culture Confronts Psychiatry

研究代表者
斎藤　喬（Saito, Takashi）

南山大学・南山宗教文化研究所・研究員

研究者番号：４０７２１４０２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,800,000円

研究成果の概要（和文）：本研究においては、「宗教文化の精神医学化」を主題として、明治期の怪談噺の口演速記を対象に、いわゆる「憑依」に関する表象を調査・分析した。そこでは特に、近代精神医学の知識が日本に初めて流入する明治期に焦点を当てている。江戸以来の幽霊や妖怪の演目で人気を誇っていた落語家と講談師が、それらの憑依現象を精神病理として診断する言説と作品内でどのように向き合っているかを問題にした。個々の作品を分析した結果、当時の優れた噺家たちは、精神医学の言説を受容しつつ否定せずに江戸以来の恐怖を聴衆に聞かせることができるため、そこでは同時に憑依現象の信仰にまつわる宗教文化を残存させていることが判明した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究では、宗教学の観点から明治期における日本の精神医学の言説を批判的に読み直し、さらにそこで得られた成果を基に怪談噺の調査と分析を行った。当時の精神医学の観点からだと、憑依現象は紛れもなく「病理」である。しかしながら、依現象はそれだけを取り出して治療対象とできるような「病理」とは簡単に言い切れない。そこでもし宗教文化的な背景を考慮に入れる必要があるとすれば、憑依現象を基礎づける「信仰」を精察することが不可欠となり、それがなければ「病理」の根本はなにも見えて来ない。このようにして、憑依現象の「病理」の根本に「信仰」を位置づけ、診断と治療の社会性を主題化したことが本研究の成果である。

研究成果の概要（英文）：
In this research, with the theme of “psychiatrization of religious culture,” we investigated and analyzed the representations of “possession” in ghost stories from the Meiji period. In particular, the study focuses on the Meiji period, when knowledge of modern psychiatry first entered Japan. I questioned how rakugo and kodan, who had been popular for their repertoire of ghosts and monsters since the Edo period, confronted discourses that diagnose these possession phenomena as psychopathology. Analysis of works revealed that the best rakugo and kodan storytellers of the time were able to play the ghost stories since Edo without denying the psychiatric discourse, thereby simultaneously preserving the religious culture associated with the belief in possession.

研究分野：宗教学

キーワード：怪談　憑依　表象　宗教文化　精神医学　神経　恐怖　ホラー

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１（共通）

１．研究開始当初の背景

本研究の学術的背景として重要となるのは、憑依現象を病理化する精神医学者たちの言説であった。島村俊一は明治二十四年(1891)に島根県で「狐憑病」診断の嚆矢となる実地調査を行ったが、その結果を報告した論文（「島根県下狐憑病取調報告」）の中で、当地で「人狐（にんこ）」と呼ばれている家筋に対する婚姻忌避などの伝統風俗は社会上の害毒であると指摘し、精神医学によって取り除かれるべきであることを明言している。また島村の報告を受けて、帝国大学医科大学精神病学教室の初代教授榊俶はその論文（「狐憑病に就て」）で、ヨーロッパでは獣化妄想として「狼男」を「リカントロピア」と呼んでいることを参照して、日本独自の症例である「狐憑病」の別名に「アロペカントロピア」を提案した上で、自験例五十二名から「狐憑病」における「体感異常」や「人格変容」の症状の重要性を指摘した。

当然のことながら、島村や榊ら専門医が治療の対象としたのは、精神病というカテゴリーに分類される下位概念としての「狐憑病」であり、彼らの精神医学によってそれが治癒可能なものとなる条件として、患者は科学的な精神医学を日常生活の中に取り込むことができる程度には近代化された認識が必要になってくる。憑依現象を病理として捉える疾病分類は、それについての診断基準や治療技法と対応しているが、その前提として心身の不調を訴える患者とその周囲の人々の世界観がある程度まで近代的なものであることが、ここでは論点となるのである。なぜなら、島村が調査を行った島根県の「人狐」に代表される「憑きもの」筋に関連する憑依現象の多くは、被憑依者個人というよりは家同士の葛藤にその原因があり、社会的に異常な状態の解決あるいは是正のために祈祷師が呼び出されるからだ。つまりここでの憑依現象は言うなれば社会問題であり、宗教文化に根差した判断や治療というのも個人だけではなく、家族や共同体における関係健全化のために施されることになる。そのため、憑依現象を個人的な病理として析出してしまうことで、そこから露呈するはずだった社会的な異常が顕在化しなくなる可能性が生じるのである。

２．研究の目的

本研究の目的は、明治期に刊行された落語・講談の怪談噺を対象に、人に何かが「つく」という事態の本質を考察することである。江戸から受け継がれた怪談噺は、動物が「つく」幽霊が「つく」宗教文化を前提にしているが、迷信打破を掲げて憑依現象を病理として把握する精神医学の介入によって、伝統的な信仰と科学的な認識との間で葛藤を抱え込むことになった。しかし憑依現象は、現代でも日本のみならず世界各地で発生する普遍的な出来事であり、精神医学との葛藤は解決済みとなっていない。本研究は、こうした「宗教文化の精神医学化」を終わることのない啓蒙のプロセスとして捉えた上で、被憑依者個人とその共同体の世界観を再編成する重大な契機となる憑依現象の問題に、先行研究では顧みられなかった口演速記という素材で接近することで、新たな研究領域を切り開くことを目指した。

３．研究の方法

本研究では、憑依現象を社会史上に文脈化し定置させる宗教文化が精神医学の介入のために変容する過程と並行して、明治以降の寄席芸能において江戸以来の狐狸妖怪や死霊の演目が、敢えて精神医学の用語を取り入れるなどして積極的に語られ、近代化しつつあるはずの都市民に大いに受けていたことに着目した。明治十七年(1884)刊行の三遊亭円朝口演『怪談牡丹灯籠』を嚆矢とする速記本の隆盛によって、私たちは憑依現象の命名権をめぐって競合する精神医学と宗教文化の葛藤を、高座の現場で記録された怪談噺の事例から目の当たりにすることができる。怪談噺の口演テクストは、話芸の型に収まっているとは言え一方向的に「迷信打破」には与しておらず、憑依をめぐる覇権争いを活き活きと伝えているのである。申請者は、怪談噺が聴衆に惹き起こす恐怖体験について、口演テクストの分析を通して調査を進めている。本研究においては、そのような恐怖体験を憑依の表象という視座から検証し直すことで、現代的なホラー作品にも影響を及ぼす怪談ものが明治期にどのように誕生したのかを探り、そこから宗教の近代化という問題の一端を明らかにしようとした。

４．研究成果

(1)「明治期日本における精神医学と狸憑き」『アカデミア　人文・自然科学編』南山学会、第 21 号、315-322 頁、2021 年 1 月

明治期の精神医学者たちは、伝統的な「狐憑き」を「狐憑病」という精神病として診断した。「狐憑病」の概念は、「悪魔憑き」「狼憑き」を治療対象としてきたヨーロッパの精神医学を学んできた日本の精神医学者たちにとって、迷信打破を実現するために重要なものだった。帝国大学医科大学精神病学教授榊俶が先達となって、島村俊一は島根県で「狐憑き」の現地調査を行い、荒木

蒼太郎は徳島県で「犬神憑き」「狸憑き」の現地調査を行った。「狐憑病」は、門脇真枝の『狐憑病新論』(1902)をピークに、大正期に高知県で「犬神憑き」の調査を行った森田正馬が提唱した「祈祷性精神病」に取って替わられていく。ここでは、特に荒木の論文に注目し、彼が「狐憑病」という名称を避けて「附憑病」を使用し続けたことや、「人格変換」と「獣化妄想」を二大症状としたことなどに焦点を当てている。文化精神医学的なアプローチをした荒木の業績は、日本の憑きものが「狐」という動物霊に一般化できないこと、動物に成り代わる憑依現象と家筋としての憑きものを分けて捉えることなど、非常に示唆に富む内容を含んでいる

(2)「伊予の八百八狸信仰における宗教文化的背景」『論集』印度学宗教学会、第 48 号、13-32 頁、2022 年 3 月
現代の松山における八百八狸信仰の根拠は、講談師田辺南龍の口演速記本『八百八狸』である。ここでは、信仰の前提となる「松山騒動」や先行する実録小説を参照しながら、憑依現象を中心とした松山周辺の宗教文化的背景を検証している。特に、創作であるはずの講談の物語の文学史的位置づけに焦点を当てながら、八百八狸を神として祀る由来譚の伝説化について考察した。

(3)「語り継がれる狸合戦――阿波における憑依と遊戯」『怪異と遊ぶ』青弓社、40-63 頁、2022 年 4 月、
講談師神田伯龍の速記本で知られる『狸合戦』三部作(1910 年)は、享保年間に阿波で発生した憑き物騒動に基づいている。そこでは紺屋の奉公人に金長という狸が憑依し、商売繁盛だけでなく失せ物や病気直しに多大な効験を示した。しかし金長があまりに霊験あらたかであるがゆえに、四国中の信仰を集めて狸たちを牛耳る六右衛門という狸と対立し、最終的に金長勢と六右衛門勢による大合戦に及ぶというのがこの伝説の筋書きである。講談には先行する江戸末期の文献資料が存在しており、奉公人の口走る「金長大明神」が紺屋の屋敷神となり近隣の流行神となる様子が具体的に描かれている。ただし、伯龍口演には金長以外にも多くの狸話が盛り込まれており、さらに合戦の細部の描写は先行文献を凌駕する情報量を誇る。金長の物語は時代を超え今日までさまざまな形で翻案されているが、憑依の現象と信仰の発生という前提を抜きにすると、狸が語る意味が見えなくなるだろう。

(4)「『真景累ケ淵』と『怪談』における恐怖の語り―J ホラーは怪談噺の夢を見るか？」『ユリイカ』青土社、第 54 巻 11 号、281-289 頁、2022 年 8 月
五街道雲助にインスピレーションを受けたという監督中田秀夫は、インタビューで『怪談』は恐怖映画であるよりも恋愛映画であり、『リング』のようなモダンホラーとは違うと言っている。これは怪談噺を現代的に解釈する際の常套句であり、『怪談牡丹燈籠』についても、これは恐怖よりも恋愛の物語であると言及されてきた。しかしながら、当時の寄席で怪談噺に触れた人々は名人の高座の恐怖について書き残している。現代人が怪談噺に恐怖を覚えないとすれば、それは恐怖体験に必要な宗教リテラシーが欠如しているからに他ならない。円朝の『累ヶ淵』に恐怖するためには、「累曼荼羅」と言われる「因果の道理」についての実感、つまりは信仰が不可欠である。円朝が「神経病」という心理的還元を逆手に取って、むしろ恐怖すべき幽霊像を創作できたのは、ひとえにこのような当時の信仰に基づく因果の物語を堅固に構成し得たからだと見るべきである。

(5)「津山事件における復讐の論理と戦慄の問題」『中央評論』中央大学、第 74 巻 4 号、58-67 頁、2023 年 1 月
昭和 13 年(1938)年、岡山県西加茂村で通称「津山事件」が発生した。これは、日本犯罪史上最悪とも言われる大量殺人事件だが、このような凶悪事件の「語り narrative」がなぜ「戦慄 horror」を引き起こすのかを、ここではタラル・アサドの「自爆攻撃」に関する所論を参照しながら考察した。また、この事件は小説や映画や漫画になることで、それぞれの媒体に即した形で解釈されてきたことから、メディアミックスされた作品が持つ意味についても言及している。

(6)「ホラーと宗教リテラシー――鈴木光司『リング』における憑依と供養」『現代宗教 2024』、国際宗教研究所、247-269 頁、2024 年 1 月
鈴木光司『リング』は、もっとも有名な現代ホラー作品の一つである。ホラーの宗教性を考える上で、この作品の恐怖が読者の宗教リテラシーに対して果たす役割は重要である。読書行為の恐怖体験が宗教文化的な知識や経験と接続する可能性について調査するとき、鍵概念となるのは「憑依」と「供養」である。宗教文化を指示するこれらの用語はどちらも作品内で登場するのだが、調伏することも慰撫することもできない最強のホラーアイコンとなった山村貞子の恐怖は、「憑依」への信仰と「供養」の不可能性の上に成り立っている。ここでは特に、小説の『リング』が「不幸の手紙」形式の「呪いのビデオ」にウィルス感染の恐怖を織り交ぜた都市伝説ホラーである点に着目しながら、この恐怖の前提にある怨念の「憑依」と遺骨の「供養」の問題について考察した。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計4件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 斎藤喬	４．巻 第54巻11号
２．論文標題 『真景累ケ淵』と『怪談』における恐怖の語り　Jホラーは怪談噺の夢を見るか？	５．発行年 2022年
３．雑誌名 ユリイカ	６．最初と最後の頁 281-289
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 斎藤喬	４．巻 第74巻4号
２．論文標題 津山事件における復讐の論理と戦慄の問題	５．発行年 2023年
３．雑誌名 中央評論	６．最初と最後の頁 58-67
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 斎藤喬	４．巻 48
２．論文標題 伊予の八百八狸信仰における宗教文化的背景	５．発行年 2022年
３．雑誌名 論集	６．最初と最後の頁 印刷中
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 斎藤喬	４．巻 21
２．論文標題 明治期日本における精神医学と狸憑き	５．発行年 2021年
３．雑誌名 アカデミア　人文・自然科学編	６．最初と最後の頁 315-322
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計6件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

1．発表者名 斎藤喬
2．発表標題 津山事件における戦慄と宗教
3．学会等名 日本宗教学会
4．発表年 2022年

1．発表者名 斎藤喬
2．発表標題 伊予の八百八狸における憑依の表象
3．学会等名 印度学宗教学会
4．発表年 2021年

1．発表者名 斎藤喬
2．発表標題 柳桜口演『四谷怪談』における怪談噺の粘着性
3．学会等名 表象文化論学会
4．発表年 2021年

1．発表者名 斎藤喬
2．発表標題 南龍口演『八百八狸』にみる憑依と守護
3．学会等名 日本宗教学会
4．発表年 2021年

１．発表者名 斎藤喬
２．発表標題 伊予の憑依文化からみる八百八狸
３．学会等名 西日本宗教学会
４．発表年 2022年

１．発表者名 斎藤喬
２．発表標題 阿波の狸合戦における狸憑きの語り
３．学会等名 西日本宗教学会
４．発表年 2021年

〔図書〕　計1件

１．著者名 一柳廣孝、大道晴香、伊藤龍平、斎藤喬、永島大輝、構大樹、今藤晃裕、橋本順光、橋迫瑞穂、市川寛也、川奈まり子	４．発行年 2022年
２．出版社 青弓社	５．総ページ数 296
３．書名 怪異と遊ぶ	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関